

喜界島方言における 動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー*†

Expansion of verbal accentual units and sentence-final prosody of yes/no questions in Kikai Ryukyuan

白田 理人 (志學館大学)

shiratarihito@shigakukan.ac.jp / shiratarihito@gmail.com

要旨

本発表は、喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）で話される方言のうち北部の小野津方言と南部の上嘉鉄方言を対象に、動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディーへの影響について記述・考察する。小野津方言・上嘉鉄方言ともに、末尾が上昇するアクセント型の動詞の活用語尾の縮約に伴い、動詞のアクセント単位が文末助詞まで拡張し、上昇位置が文末助詞に移動することがある。小野津方言では、活用語尾が促音化する場合にのみアクセント単位が拡張し、撥音化する場合は拡張しない。一方、上嘉鉄方言では、促音化の場合に加え、撥音化の場合にもアクセント単位の拡張が起こる。小野津方言の場合、真偽疑問文末は通常低いため、アクセント単位の拡張によって文末が低から高に転じることになる。上嘉鉄方言の場合、真偽疑問文末は通常高いため、アクセント単位が拡張しても、上昇位置が変わるだけで文末の高低には影響しない。

1 はじめに

喜界島方言は、鹿児島県大島郡喜界町で話されており、琉球諸語に属する地域変種のうち最も北東に位置する（cf. 図1）。島内には30余の集落があり、方言差があるが、本発表は、北部の小野津集落の方言（以降小野津方言）と、南部の上嘉鉄集落の方言（以降上嘉鉄方言）を対象とする。

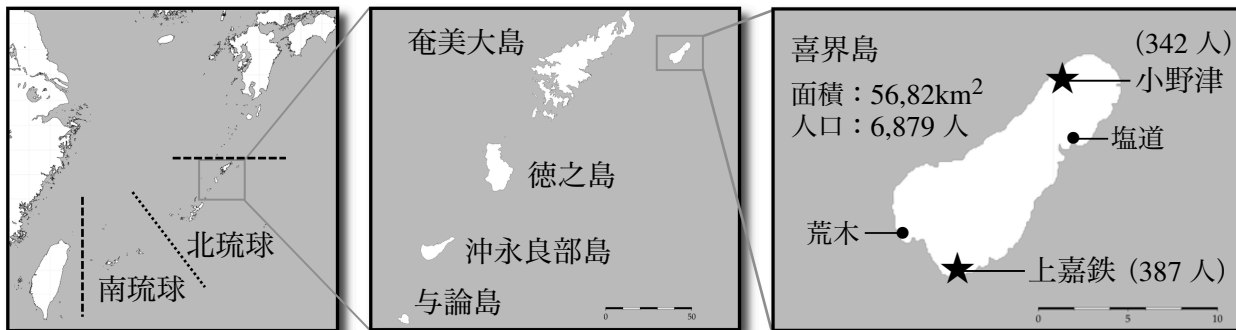


図1 小野津集落／上嘉鉄集落の位置（琉球列島と周辺／奄美群島／喜界島）¹

喜界島方言（及び奄美大島方言，cf. Niinaga 2014:459）では、動詞の直説法非過去形に文末助詞が後続する場合、活用語尾に縮約が生じることがある。小野津方言／上嘉鉄方言ともに、通常、述語のアクセント単位に疑問文末助詞は含まれないが、活用語尾の縮約に伴い、動詞のアクセン

* 本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」・「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」及び日本学術振興会科研費 KAKENHI 19H00530・19K13193 の研究成果を報告したものである。

† 本研究は、第八回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（2020年7月17日）における発表内容にデータの追加、分析の再検討を行ったものである。

¹ 国土地理院発行のデータから Thomas Pellard 氏（CRLAO）が作成した地図を編集して用いている。人口は喜界町発行の資料に基づく、2020年4月1日現在のものである。

ト単位が文末助詞まで拡張することがある。本発表は、真偽疑問文を例に、動詞のアクセント単位の拡張現象と疑問文末のプロソディーへの影響について、平叙文と対照しつつ記述・考察する。

データは、発表者が2019～2020年に小野津集落出身・在住の女性2名（1937(S12)年生・1945(S20)年生）、上嘉鉄集落出身・在住の女性2名（1938(S13)年生・1944(S19)年生）、男性1名（1960(S35)年生）を協力者とする聞き取り調査で得たものを用いる。表記は基本的にIPAによる音声表記を用いるが、語頭の母音の前の声門閉鎖音 [ʔ] は表記せず、[r] は r として表記し、無気喉頭化音と有気非喉頭化音の対立は無気音と有気音の対立として表記する。必要に応じて、動詞のアクセント単位（アクセント実現のドメイン）に含まれる音列を{ }で示す。アクセント単位の拡張を示す語例は、下線または **網掛け** によってその他の語例と区別する。

2 背景

2.1 動詞アクセント

上野・西岡（1995）に基づき、小野津方言／上嘉鉄方言の動詞のアクセントを表1にまとめて示す。ただし、語例は本発表での表記に統一し、2拍語を追加している。表に示す通り、小野津方言／上嘉鉄方言ともに、I／IIの二つの系列が区別される。小野津方言では、系列Iは2拍目が、系列IIは末尾拍が上昇する（ただし、系列Iの2拍語は語頭が上昇し、系列IIの5拍語は次末拍が上昇する）。一方、上嘉鉄方言では、系列Iは末尾拍が、系列IIは次末拍が上昇する。

表1 小野津方言／上嘉鉄方言の動詞のアクセント (cf. 上野・西岡 1995:147,148,151,152,155)

系列	小野津方言				上嘉鉄方言			
	2拍	3拍	4拍	5拍	2拍	3拍	4拍	5拍
I	[u]i いる	ki[kju]i 聞く	a[ŋi]jui 上げる	p ^h a[zi]mijui 始める	u[ri] いる	[tei]tei: 聞く	[agi]i: 上げる	[k ^h at ^h ami]i: 固める
II	a[i] ある	[mi]ju[i] 見る	[sa]ŋiju[i] 下げる	[na]ŋari[ju]i 流れる	[a]ri ある	mi[ri]: 見る	[sa]gi[i]: 下げる	[naga]ri[i]: 流れる

2.2 真偽疑問文末

喜界島方言の真偽疑問文末には、文末助詞=*na*/*ka* が用いられる。*=na* は答えを持つ聞き手に働きかけ、情報を求める〈問い〉の言語行為に用いられる。一方、*=ka* は、答えを持つ聞き手を必要としない、「疑問に思っている」という心情の吐露や自問などの〈疑い〉の言語行為に用いられる（〈問い〉と〈疑い〉の言語行為については金水 2015 参照）。動詞非過去形 (e.g. *ari~ai* 「ある」) に=*na* が後続すると、*n* が口蓋化して *ɲ* になり、さらに、動詞の末尾拍が撥音化する (e.g. *aɲna* 「ある?」)。一方、=*ka* が後続する場合は、動詞の末尾拍が促音化する (e.g. *akka* 「あるだろうか?」)。(1)・(2)に小野津方言の文例を示す (cf. *numjui* 「飲む」)。

(1) *daja huri numjupna?*

「お前はこれを飲むか?」

(2) *are: huri numjukka?*

「彼はこれを飲むだろうか?」

真偽疑問文末のプロソディーについて、小野津方言では低くなるが (e.g. *[mi]zuna*/*[mi]zuka* 「水か?／水だろうか?」, cf. *[mi]zu* 「水」) 上嘉鉄方言では高くなる (e.g. *[nabina]*/*[nabika* 「鍋か?」

／鍋だろうか?」, cf. [na]bi「鍋」)。通常, 文末助詞は述語のアクセント単位に含まれないが, 末尾が上昇するアクセント型の動詞非過去形に文末助詞が後続し, 活用語尾が縮約すると, アクセント単位が文末助詞まで拡張し, 上昇位置が文末助詞に移動することがある²。(3)・(4)に末尾が上昇するアクセント型の名詞／動詞非過去形に疑問文末助詞が後続した例を示す。

- (3) 名詞／動詞非過去形 +=na/=ka (小野津)
- a. {na[bī]}「鍋」 +=na/=ka → {na[bī]}na/{na[bī]}ka「鍋か?／鍋だろうか?」
- b. {a[i]}「ある」 +=na/=ka → {a[n]}na/{ak[ka]}「あるか?／あるだろうか?」
- (4) 名詞／動詞非過去形 +=na/=ka (上嘉鉄)
- a. {mi[du]}「水」 +=na/=ka → {mi[du]}na/{mi[du]}ka「水か?／水だろうか?」
- b. {u[ri]}「いる」 +=na/=ka → {[u]n[na]}/uk[ka]}「いるか?／いるだろうか?」

2.3 島内他方言の先行研究

上野 (1997) は, 島中／湾／中里／荒木／川嶺／花良治／塩道／志戸桶の各集落の方言について, 動詞非過去形及びこれに疑問文末助詞が後続する語例を報告している。このうち, =na/=kaの語例が揃っている荒木集落の方言 (以降荒木方言) 及び塩道集落の方言 (以降塩道方言) について, 末尾が上昇する動詞 (I型) の非過去形に疑問文末助詞が後続する語例を表2に挙げる³。

表2を見ると, 荒木方言では, 活用語尾が縮約してもアクセント単位の拡張が起こらないことが分かる。また, 塩道方言では, =naが後続して活用語尾が撥音化する場合にはアクセント単位の拡張は起こらないが, =kaが後続して促音化する場合には拡張が起こることが分かる。

表2 動詞非過去形 + 疑問文末助詞 (荒木／塩道, cf. 上野 1997:126,139,169,171)

方言	意味	動詞単独	動詞 +=na	動詞 +=ka
荒木	聞く	{[tɕi]tɕu[ĩ]}	{[tɕi]tɕu[n]}na	{[tɕi]tɕu[k]}ka
	握る	{[ɲiɲ]ɲu[ĩ]}	{[ɲiɲ]ɲu[n]}na	{[ɲiɲ]ɲu[k]}ka
塩道	聞く	{[tɕi]tɕu[i]}	{[tɕi]tɕu[n]}na	{[tɕi]tɕu[k]ka}
	買う	{[ho:]ju[i]}	{[ho:]ju[n]}na	{[ho:]juk[ka]}

3 動詞アクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー

3.1 小野津方言の場合

表3に, 小野津方言において動詞非過去形に疑問文末助詞が後続する語例を示す。系列IIのうち末尾が上昇する2～4拍語について, 動詞非過去形に=kaが後続して活用語尾が促音化すると,

² 上嘉鉄方言において, =kaが後続して活用語尾が促音化する場合 (cf. (4)b), 文末の上昇を真偽疑問文末のイントネーションによるものと捉え, 促音が担う上昇が実現していないだけで, アクセント単位が拡張しているわけではない, とする分析もありうるが, 後述するように, =saを伴う平叙文末にも上昇が見られるため, 本発表では促音化の場合にもアクセント単位の拡張が起こると一般化している。

³ 上野 (1997) では, 中里集落の方言についても動詞非過去形に=na/=kaが後続する例が報告されているが, 解釈が複雑になるため割愛する。また, 荒木方言について, 動詞のアクセント単位が疑問文末助詞まで拡張する例が一つだけ報告されており, 音調型の揺れがある可能性もある (e.g. {wa[ra]i[n]}「笑う」, {wa[ra]ji[n]}na/{wa[ra]ik[ka]}「笑うか」, cf. 上野 1997:137)。

文末助詞までアクセント単位が拡張する。アクセント単位の拡張によって、上昇位置が文末助詞に移動し、文末が低から高に転じる。文末助詞=na が後続して活用語尾が撥音化する場合には、アクセント単位の拡張は起こらない。このように、塩道方言と類似する点が見られる。

表3 動詞非過去形 + 疑問文末助詞 (小野津)

系列	拍数	意味	動詞単独	動詞 +=na	動詞 +=ka
I	2	いる	[u]i	[u]ŋna	[uk]ka
	3	売る	u[ju]i	u[ju]ŋna	u[juk]ka
	4	踊る	u[du]jui	u[du]juŋna	u[du]jukka
	5	働く	p ^h a[ta]rakjui	p ^h a[ta]rakjuŋna	p ^h a[ta]rakjukka
II	2	ある	{a[i]}	{a[ŋ]}na	{ak[ka]}
		来る	{k ^h ju[i]}	{k ^h ju[ŋ]}na	{k ^h juk[ka]}
	3	飲む	{[nu]mju[i]}	{[nu]mju[ŋ]}na	{[nu]mjuk[ka]}
		見る	{[mi]ju[i]}	{[mi]ju[ŋ]}na	{[mi]juk[ka]}
	4	戻る	{[mu]duju[i]}	{[mu]duju[ŋ]}na	{[mu]dujuk[ka]}
		払う	{[p ^h a]raju[i]}	{[p ^h a]raju[ŋ]}na	{[p ^h a]rajuk[ka]}
	5	集まる	[a]tsuma[ju]i	[a]tsuma[ju]ŋna	[a]tsuma[juk]ka

(5) に、末尾が上昇するアクセント型の動詞の否定非過去形に疑問文末助詞が後続する語例を示す。=ka が後続する場合、活用語尾が縮約せずに撥音で現れる語形と、縮約して促音で現れる語形が見られる。(5) を見ると、活用語尾が促音になる場合はアクセント単位が拡張するのに対し、撥音の場合は拡張しないことが分かる。なお、名詞の場合も、末尾が撥音でもアクセント単位は拡張しない (e.g. {ki[N]} 「着物」, {ki[n]}na/{ki[ŋ]}ka 「着物か? / 着物だろうか?」)。

(5) 動詞否定非過去形 +=na/=ka (小野津)

- a. {[nu]ma[:]}/{[nu]ma[N]} 「飲まない」 +=na/=ka
 → {[nu]ma[n]}na/{[nu]ma[ŋ]}ka/{[nu]mak[ka]} 「飲まない (だろう) か?」
- b. {[mu]dura[:]}/{[mu]dura[N]} 「戻らない」 +=na/=ka
 → {[mu]dura[n]}na/{[mu]dura[ŋ]}ka/{[mu]durak[ka]} 「戻らない (だろう) か?」

以上から、小野津方言で動詞のアクセント単位が文末助詞まで拡張する現象は、促音が上昇を担えないために起こっていると考えられる。類例として、末尾が上昇する型の4拍名詞に格助詞が後続する場合、末尾が自立拍/撥音の場合は上昇を担う (e.g. {[më:]ra[bī]} 「若い女」, {[më:]ra[bī]}ŋa 「若い女が」, {[jak]kwa[N]} 「やかん」, {[jak]kwa[ŋ]}ŋa 「やかんが」) が、長母音の2拍目の場合は上昇を担えず、アクセント単位が拡張し上昇位置が助詞に移動する (e.g. {[u]tugë[:]} 「顎」, {[u]tugë[:]ŋa} 「顎が」, cf. 上野 2016:100)。

平叙文における動詞非過去形の縮約とプロソディーについて、従属節を作る逆接助詞=ŋa / 理由助詞=sa は、活用語尾を縮約させる形式であり、脱従属化して平叙文末に用いられ、それぞれ、

=na/=ka の場合と同じ音調型を示す (e.g. u[ju]ŋŋa/u[jus]sa 「売るよ, u[du]juŋŋa/u[du]jussa 「踊るよ」, {[nu]mju[ŋ]ŋa/{[nu]mjus[sa]} 「飲むよ」, {[mu]duju[ŋ]ŋa/{[mu]dujus[sa]} 「戻るよ」, ただし, =na/=ka を伴う語形よりピッチレンジが狭い傾向あり)。よって, 小野津方言では, 文末の高低による平叙文と真偽疑問文の区別はないと考えられる。

3.2 上嘉鉄方言の場合

表 4 に, 上嘉鉄方言において動詞非過去形に疑問文末助詞が後続する語例を示す。末尾が上昇する系列 I について, 活用語尾が促音化する場合に加え, 撥音化する場合にも文末助詞までアクセント単位が拡張し, 上昇位置が文末助詞に移動する。なお, 前述のように真偽疑問文末は通常高くなるため, アクセント単位が拡張しても, 上昇位置が変わるだけで文末の高低には影響しない。

表 4 動詞非過去形 + 疑問文末助詞 (上嘉鉄)

系列	拍数	意味	動詞単独	動詞 +=na	動詞 +=ka
I	2	いる	{u[ri]}	{[u]ŋ[ŋa]}	{uk[ka]}
		言う	{ji[:]}	{[ji]ŋ[ŋa]}	{jik[ka]}
	3	売る	{[u]ri[:]}	{[uri]ŋ[ŋa]}	{[u]rik[ka]}
		着る	{[tɕi]ri[:]}	{[tɕiri]ŋ[ŋa]}	{[tɕi]rik[ka]}
	4	踊る	{[udu]ri[:]}	{[uduri]ŋ[ŋa]}	{[udu]rik[ka]}
		洗う	{[ara]i[:]}	{[arai]ŋ[ŋa]}	{[ara]ik[ka]}
5	働く	{[hatara]tɕi[:]}	{[hataratɕi]ŋ[ŋa]}	{[hatara]tɕik[ka]}	
II	2	ある	[a]ri	[a]ŋŋa	[akka]
	3	飲む	nu[mi]:	nu[mi]ŋŋa	nu[mikka]
	4	戻る	[mu]du[ri]:	[mu]du[ri]ŋŋa	[mu]du[rikka]
	5	集まる	[atu]ma[ri]:	[atu]ma[ri]ŋŋa	[atu]ma[rikka]

否定非過去形に疑問文末助詞が後続する例 ((6) 参照) を観察すると, 動詞と助詞の境界が重子音になる場合のみアクセント単位の拡張が起こることが分かる。過去形の場合は拡張が起こらない (e.g. {u[ti]} 「売った」, {u[ti]na/{u[ti]ka} 「売ったか? / 売ただろうか?」, {[u]du[ti]} 「踊った」, {[u]du[ti]na/{[u]du[ti]ka} 「踊ったか? / 踊ただろうか?」) が, これも, 境界が重子音にならないためと言える。名詞の場合は, 末尾が撥音でも (境界が重子音になっても) アクセント単位は拡張しない (e.g. {tɕi[n]} 「着物」, {tɕi[n]na/{tɕi[ŋ]ka} 「着物か? / 着物だろうか?」)。

(6) 動詞否定非過去形 +=na/=ka (上嘉鉄)

{ja[:]}/{ja[n]} 「言わない」 +=na/=ka
 → {[ja]n[na]}/[ja[ŋ]ka}/[jak[ka]} 「言わない (だろう) か?」

以上から, 上嘉鉄方言で述語のアクセント単位が疑問文末助詞まで拡張する条件は, 動詞であること, 及び, 助詞との境界が重子音であること, の二つであると一般化できる。動詞の活用語尾と文末助詞の境界が重子音になることで, 境界が曖昧になり, 文末助詞が活用語尾化して音韻的独立性を失ったために, アクセント単位の拡張が起こっている, という可能性がある。

平叙文における動詞非過去形の縮約とプロソディーについて、小野津方言と同様に、活用語尾を縮約させる助詞= η a/=sa が平叙文末に用いられるが、平叙文末と真偽疑問文末とではプロソディーに相違が見られる (7) 参照)。前述のように、真偽疑問文末は通常高いのに対し、平叙文末は通常低く、アクセント単位の拡張が起こって末尾が上昇しても、真偽疑問文末に比べて上昇の程度が抑えられる傾向がある (7) では、この「半上昇」を % で示して区別する)。

(7) 平叙文と真偽疑問文の文末のプロソディーの比較 (上嘉鉄)

- a. [a]ri[mu {uri}η%ηa]./{u}ris%sa}. 「あれも売るよ。」
- b. [a]ri[mu {uri}n[ηa]?/{u}rik[ka]? 「あれも売るか? /あれも売らるうか?」
- c. [a]ri[mu] nu[min]ηa./nu[mis]sa. 「あれも飲むよ。」
- d. [a]ri[mu] nu[min]ηa?/nu[mikka]? 「あれも飲むか? /あれも飲むらるうか?」

4 まとめと課題

本発表では、喜界島小野津方言／上嘉鉄方言を対象に、動詞の活用語尾の縮約に伴ってアクセント単位が文末助詞まで拡張する現象と、真偽疑問文末のプロソディーへの影響について記述・分析した。主な観察・主張 (cf. 表 5) として、まず、小野津方言では、活用語尾が促音化する場合にのみアクセント単位の拡張が起こるのに対し、上嘉鉄方言では、撥音化の場合にも拡張が起こることを示した。また、小野津方言では、促音が上昇を担えないためにアクセント単位の拡張が起こること、上嘉鉄方言では、動詞と文末助詞の境界の重子音化を契機として、文末助詞が活用語尾化している可能性があることを論じた。さらに、文末のプロソディーに関して、小野津方言の場合、真偽疑問文末は通常低く、アクセント単位の拡張によって文末が低から高に転じること、上嘉鉄方言の場合、真偽疑問文末は通常高く、アクセント単位が拡張しても文末の高低に影響しないことを指摘した。加えて、小野津方言では平叙文／真偽疑問文に文末の高低による区別がないのに対し、上嘉鉄方言では平叙文末が低く、真偽疑問文末が高くなり区別されることを示した。

表 5 真偽疑問文末のプロソディーと動詞のアクセント単位の拡張

方言	文末 (通常)	平叙文と の区別	非過去形活用語尾縮約とアクセント単位拡張			
			撥音化	促音化	要因	文末交替
小野津	低	なし	拡張せず	拡張	促音上昇回避	低 → 高
上嘉鉄	高	あり	拡張	拡張	文末助詞活用語尾化	なし

今後の課題として、様々な述語形式／情報構造を伴う疑問文のプロソディーの詳細な記述と、方言間の対照が挙げられる。

参考文献

上野善道 (1997) 「喜界島方言の活用形のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』 25:95-189.
 —— (2016) 「喜界島小野津方言のアクセント体系—外来語と地名語彙から見る—」『音声研究』 20(3):95-111.
 上野善道・西岡敏 (1995) 「喜界島方言の動詞継続相のアクセント」『琉球の方言』 18・19:145-163.
 金水敏 (2015) 「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』 5(3):108-121.
 Niinaga, Yuto. 2014. *A Grammar of Yuwan, a Northern Ryukyuan Language*. A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of The University of Tokyo.